

## ? アフリカ 26 ジンバブエ 入植者たちのスポーツ ライフ

著者	平野 克己
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
シリーズタイトル	アジアを見る眼
シリーズ番号	90
雑誌名	「あそび」と「暮らし」：第三世界の娯楽産業
ページ	178-182
発行年	1994
出版者	アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00017801">http://hdl.handle.net/2344/00017801</a>

## 入植者たちのスポーツライフ

平野克己

これから紹介するのはヨーロッパ系ジンバブエ人たちのスポーツ状況である。彼らはまったく異質の生活文化を携えてアフリカに入植してきた。母国から遠く離れ、土着社会にも吸収されずに成立した、小さくて孤独な閉鎖社会。そこでの楽しみはスポーツである。あまり馴染みのない国の少数集団の、しかもスポーツの話とあつては、まずは日本人に関係のあるところから始めよう。

### 日本のライバル?

一九九〇年末にジンバブエの首都ハラレに出張した際、少々意外な人物に出会った。住友銀行の宿沢広朗氏である。といってご存知なければ、

かつて早稲田大学ラグビー部の名スクラムハーフ、当時全日本監督の宿沢さんだ。実は、ラグビーのアフリカ選手権決勝戦がこゝで行われることになっていて、宿沢さんはわざわざ日本か

らその観戦のために来ていたのであった。対戦カードはジンバブエ対モロッコ。ここでの勝者がおそらく、翌年に行われるワールドカップで全日本チームと対戦することになる。その偵察であった。

翌日曜日、警察関係者専用のスポーツクラブのなかにある陸上競技場を使って試合が行われた。折角の機会なので私も同行させて貰った。三・四位決定戦はコートジボワールとアルジェリアの間で行われたが、この試合は途中で乱闘になってしまい、警察隊が出てきて両チームの選手を退場させて終わり。結局どちらが勝ったのか分からない。事態が収拾した頃合を見計らって、いよいよ決勝戦が始まった。

### 南部アフリカの強豪たち

歓声を浴びて登場してきたジンバブエチームの面々は皆白人で、バックスに一人だけ素晴らしく足の速い黒人がいた。満員の観客席にも黒人の姿はほとんど見当たらない。

宿沢さんは片時もビデオを離さずに選手たちの動きを追っていた。結果はジンバブエの圧勝。後で宿沢さんに聞いたところでは「ジンバブエは全般に若いチームで、ひとつひとつの技にはまだ甘さがある。現時点で戦えば日本は勝てるだろうが、来年このまま出場してくるとは思われないし、鍛えれば強くなる素質のチームなので油断はできない」とのことであった。さらには、できればこの国で全日本チームを合宿させたいという。「南アフリカとは無理でも、ナミ



自然するナッカーリーグ戦 (Parade, July 1992より)

ビアのチームとテストマッチができれば、精神的な面でもチームの強化につながりますからね」。当時はまだ南ア制裁がかかっていたので、世界的強豪と目される南アフリカ代表チーム「スプリングボックス」とのテストマッチは不可能であった。

現在ではナミビアが独立し、南アフリカも国際試合に復帰してきた。いずれも白人主体のチームである。ラグビー強国の登場で、ジンバブエがアフリカチャンピオンシップを獲得できる可能性は難しくなった。

さて、一九九一年のワールドカップ予選リーグで宿沢監督率いる全日本チームはジンバブエと対戦、圧勝した。

### 入植者たちのスポーツライフ

柔道も盛んで、日本人のナショナルコーチがいる。アフリカにはエジプトという柔道強国があるのでチャンピオンシップにはなかなか手が届かないのだが、それでも女子のアフリカチャンピオンを出したことがある。彼女の名はデボ

ラ・ウォーレン。ジンバブエ柔道連盟会長を務める父親の影響で十歳の頃から柔道に親しみ、一九八七年に六一キロ以下級でアフリカチャンピオンになった。その後福岡で開催された国際女子柔道選手権大会に出場、優勝した小川選手に敗れている。翌八八年にはソウル・オリンピックにも出場した。

ゴルフ好きなら、一九九二年の全英オープンで二位になったニッキイ・プライスの名をご存知だろう。彼もまたヨーロッパ系ジンバブエ人で、一九七四年に世界ジュニア選手権を制した名選手である。彼の兄ティムはハラレのゴルフクラブでインストラクターをしている。ジンバブエ出身のプロゴルファーではマーク・マクナルティも一流だ。英国人たちは、この地に入植した五年後一八九五年に最初のゴルフ場を建設した。ハラレはゴルフ場だらけ、といっても過言ではない。

女子ホッケーはモスクワ・オリンピックで金メダルを取っているし、その他にも、クリケット、乗馬、テニス、スカッシュなど、白人の日常生活とスポーツは切っても切り離せない。各スポーツクラブにはバー、レストラン、ビリヤード台やクラブルームが完備されており、そこで過ごすひとときは彼らにとって最大の娯楽であるばかりか、重要なコミュニティでもあるのだ。

## 人種混合社会とスポーツ

一九八〇年の独立以後、かつて白人が占めていたポストに多くのアフリカ人が就いた。彼らのなかにはゴルフを始めたものも多い。ラグビーや柔道でもアフリカ人の有望選手が出てきている。

確かに人種を隔てていた壁は取り壊された。しかし、崩れた境界を通り越して融合が進んでいるとは言いがたい。そのことを典型的に示しているのがサッカーだ。アフリカ人の間ではサッカーは大変な人気で、各州にリーグがあり、二月から十一月のシーズン中は毎週末に試合が行われている。大衆レベルで浸透した唯一のスポーツと言っても差し支えあるまい。だが、英本国でも盛んなこの世界的競技を、どういうわけなのか白人でやる人は少ない。ジンバブエにおいてサッカーは、完全にアフリカ人のためのスポーツらしい。

スポーツは学校教育との関係も深く、それだけに人種問題にとって侮れない意義を有する。現地のスポーツ記者ジャホル・オマールは、スポーツ界における独立後の最も重要な業績は「学校教育のなかに積極的にラグビーを取り入れた結果、人種の枠を越えた競技としてのラグビーが誕生したことだ」と語っている。十万人のヨーロッパ系ジンバブエ人が現在のところ閉鎖的に享有しているスポーツ文化。人種融和の今後を見るうえでも注目したいものだ。